

山本 剛郎教授退職記念号によせて

社会学部長 高 坂 健 次

山本 剛郎教授は、京都大学文学部史学科（人文地理学専攻）を卒業後、大阪大学大学院文学研究科（社会学専攻）を修了されました。大阪大学助手ののち、天理大学教養部講師を経て、関西学院大学社会学部へは1977年に助教授として就任されました。1983年には同・教授、1985年には大学院社会学研究科博士課程前期課程指導教授、1996年には同・後期課程指導教授になりました。都市社会学、地域社会論、移民の研究、等がご専門です。

学外にあっては、近畿都市学会、関西社会学会、日本移民学会のそれぞれ理事をお務めになったほか、雑誌『ソシオロジ』の編集委員をお務めになりました。学内においては、社会学部長職（2001-2002年度）をはじめ、全学的な要職に限ったとしても、入試部長、図書館副館長、総合研究室副室長、情報処理研究センター副長、大学評議会評議委員、などを歴任されました。

共著を含むご著書は6冊に及びます。とくに、『都市コミュニティとエスニシティ』（1997年）に対しては1998年度の栄えある日本都市学会賞（奥井記念賞）を受賞されました。初期は、西田春彦教授の影響のもと、都市や地域社会の因子分析や主成分分析など計量社会学的手法を駆使した研究をされていました。一方では甲田和衛教授の影響もあって、インドのカーストの研究や「与力」の研究をされたりしていました。1980年代に入ってから、独自のテーマと方法のもとに日系アメリカ人の研究に没頭され、これはあとも触れるように今にまで至る終生のテーマとなっています。

幾分私的な思い出に亘りますが、山本先生にはじめてお目にかかったのは、私が大阪大学の博士課程への編入試験を受けたとき、「経験社会学講座」の助手をされていたときでした。もう40年近くも前のことです。爾来私にとっては一貫しての大先輩ではありますが、その後時を経て、後輩の同僚として一緒に働かせていただきました時期もありました。

往時の阪大の社会学研究室は、教員の顔ぶれとキャラクターにも困ったのですが、独特の祝祭空間を作っていました。よく勉強もしたはずなのに、思い出すことは、ビリヤード、ハイキング、泊り込みの登山、釣り、等々。そして毎週のように、うちそろって呑んでいたように思います。助手室は、アフターファイヴになると講座や専攻を超えた寄り合いの場でもあり（とくに石橋キャンパスにあった文学部時代は、隣接の独仏哲学講座、倫理学講座、西洋史・東洋史、場合によっては医学部からの参入もあり）、ひとしきり盛り上がったのち十三界隈にくり出すのがならいでした。多くの場合、助手には酒宴のこまごまとした面倒を見、最後の一人まで面倒を見、という役割期待がありました。多くのかたが山本先生のお世話になったことを記憶しています。しかし、面倒見がよくて酒豪の山本先生が誰かの世話になったという記憶はありません。

去る11月26日、本学の人権教育室主催・吉岡記念館企画で「収容所」という暴力の現実—「キャンプ」の過去／記憶／現在—というシンポジウムが開かれました。山本先生はそこでパネリストとして講演され、あとの質疑応答に丁寧にご答えておられました。当該テーマについてはUCLAでの一年間の研究生活を最大限に生かされ、貴重なデータを収集されましたが、山本先生はシンポジウムの場では日系のH氏のこと、K氏のことをあたかも100年の知己のごとくに話されていて、聞いているものからすれば、山本先生がまるで小説家が作品のなかの登場人物と一緒に生活を共にされているがごとき感がありました。強制収容所での日系人の扱いに関しては日系人による一連の訴訟に対し、1943年には「外出禁止令違反の有罪」判決が、1944年には「強制立ち退き命令違反で有罪」判決がくだされたようですが、その後それらの

有罪判決が無効とされるなど、複雑な動きが見られるようです。人種を基準とする政策の正当性判断基準が厳格になる一方で、いつでも国家危急時の例外措置としては人種差別措置が容認される可能性のあることを指摘されていました。私は山本先生の発見や仮説内容の意義もさることながら、「面白くて仕方がない」と別の機会に語っておられた研究に対する情熱に圧倒され感服した次第です。

人当たりの優しさ、優しいもの言い、柔和な人柄については、一度でも接したものであれば誰もが知るところです。そして、お名前が暗示するように、内面の「剛」についても多くのかたは感じておられるのではないのでしょうか。学問論に及んだとき自説を曲げられたことを私は知りません。学位論文を指導したり、審査するとき、「もう少し**を入れられたほうがいいのではありませんか?」「**についてはお調べになりましたか?」「このところは、もうちょっと明確に書かれたほうがいいのではありませんか?」等々とあくまで「外は柔」。私は若い研究者（の卵たち）がそのもの言いに幻惑されて「内なる剛」をいささかでも見逃してやしないかと傍で聞いていて心配で仕方ありませんでした。柔にして剛なる山本先生、どうかお元気で研究をお続けください。そして後輩たちにハッパをかけつづけてください。